

オホーツクの工房探訪 流水硝子館



流水硝子館のショップ

四季に応じて景色もガラリと様変わりする北海道。長く厳しかった冬が去って、雪解けと共に草木が一斉に色付き、これから本格的な夏に向かう今日この頃。今回は、網走のガラス工芸工房「流水硝子館」を紹介いたします。

先日、とある講演会に出席し、記念品でガラス製のコースターをいただきました。パンフレットに目を通すと、コースターの製造元が網走の工房であると書かれてありました。

「ガラス工芸」というと、まっ先に思い浮かべるのが知名度の高い小樽。オホーツク地域に工房があるということに驚き、またたいへん興味を抱きました。



流水硝子館



軍司 昇さん

廃棄された蛍光灯の リサイクルガラスを 原料として使用。

今回の取材で話をお伺いしました工房長の軍司昇（ぐんじのぼる）さんは、沖縄でガラス工芸の修行を積まれその後、地元の網走に戻ってきたということでした。

オホーツク管内、北見市留辺蘂町には日本最大規模の水銀の処理施設である「野村興産イトム力鉱業所」があります。流水硝子館で使う材料もここから調達しているそうです。リサイクル原料である蛍光灯の廃ガラスを使うことは地球環境にも配慮したものです。

工房地下には、この廃ガラスのストックスペースがあり、年間約14トン使うとおっしゃっていました。



地下に保管してある原料のリサイクルガラス

吹きガラス体験もできます。

館内にはショップもあり、色鮮やかでセンスの良いオリジナルガラス製品が数多く並んでいます。ショップの奥、オホーツク海に面してガラス工芸の工房がありました。



工房内

吹きガラスの体験はここでできます。工房の隣には、ガラス窓で仕切られたカフェ「シーニック・カフェ 帽子岩」があり、正面のオホーツク海を眺めつつ飲み物を注文し、あわせて工房の様子も見ることができます。



溶解炉

工房には、ガラス溶解炉が24時間稼働しているために室温が高くなっています。冬の期間は、この溶解炉から出た熱を天井に張り巡らせたダクトに通し、館内の暖房にも活用しているとのことでした。これも無駄のないリサイクルです。

今後の夢などを軍司さんにお聞きしたところ、将来は、学校の社会科見学も受け入れていきたいと話しておりました。

日常生活の中で何気なく使ってるガラス製品も、お話を伺い、製作過程を実際に体験してみるとまた違ったものに見えてきます。自分で作ったガラスのグラスで飲むビールは特別な味わいがあるかもしれません。

網走方面へお越しの際は、オホーツク海に面した工房のカフェでくつろぎながら、吹きガラスの体験もしてみたいかがでしょうか。ちょっと変わった休日の過ごし方になりそうです。



カフェ帽子岩

流水硝子館

網走市南4条東6丁目2-1
TEL.0152-43-3480 FAX.0152-67-4362
ホームページ <http://www.ryuhyo-glass.com/>



体験で作るグラス選び

今回はガラス作りの挑戦です。

まずは、作成するガラスの種類を決めます。グラス(4種類)・一輪挿し(2種類)の中からロックグラスに決めました。その後は、グラスにつける模様の種類と色の選択。この段階ではどのような仕上がりになるかは、全く想像が付きません。



軍手とカバー

エプロンと右腕にカバー・軍手を装着すれば、準備完了！体験する期待感とちゃんとガラスになるんだろうかという不安な気持ちで、作業台に座りながら順番を待ちます。

グラスの元となるガラスが熱せられるのを待つ間は、職員の方から作業の説明を聞きます。この時に作業の練習をさせてくれますし、職員の方が親切丁寧に教えてくれますので、取材陣のような全くの初心者でも安心です。中が空洞になっているストロー状の鉄棒を回しながらゆっくりと息を吹き込むと、熱せられてオレンジ色のガラス玉が少しずつ膨らんでいきます。時間をかけ過ぎるとガラスの温度が下がり固まってしまう、急速に息を吹き込むと失敗してしまいますので、注意が必要です。



息を吹き込み膨らませる

先に決めたガラスの形状までガラスが大きくなれば、こちらの行程は終了です。

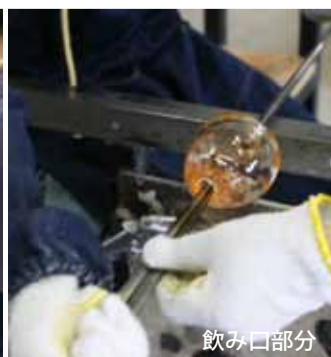
ガラスの大きさまで出来上がると、今度はガラスの底にあたる部分を作っていきます。幅の広い包丁のようなコテを使い、底にあたる部分に押し当てて形状を整えていきます。片方の手で鉄棒を転がしながら、もう片方の手で底の部分に対して垂直にコテをあてなければいけないので、なかなか難しい作業になります。

底の形状が整ったら、違う鉄棒に先ほどまで作成していたガラスを移し替えます。違う鉄棒に移し替えたことによって、飲み口側が先端にくることになります。

今度はガラスの飲み口部分を成形していきます。先ほどまで持っていた包丁のようなコテから、鉄製のトングのような菜箸のような道具に持ち替えて、飲み口の成形に入ります。ガラスの先に空いている親指ほどの穴に、鉄製の道



底の形成



飲み口部分

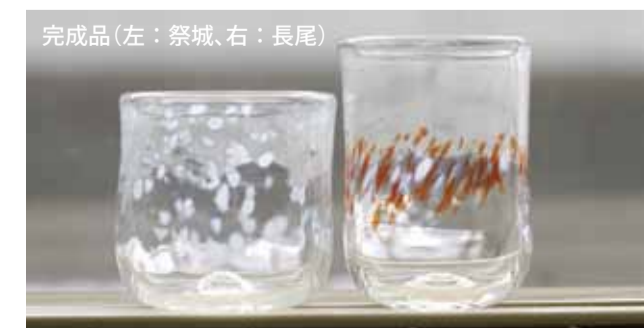
具を差し込み徐々に穴を拡げていきます。こちらの作業も、片方の手では鉄棒を転がしながら、もう片方の手でガラスに対して水平を維持しながらの作業になります。

どの行程も同じですが、ガラスは急速に冷えて固まってしまうので、固まると作業できなくなりますので、再度ガラスを熱しなければなりません。『作業→冷え固まる→熱する→作業』の繰り返しで、ガラスの形を整えていきます。(祭城)



ロンググラスに挑戦

吹きガラスを体験して、まず原料が蛍光灯をリサイクルして使っていることに驚きました。実際に作ってみて、息の吹き加減と両手を同時に動かすのが難しかったです。ロンググラスを作ったのですが、まさかガラスがついている棒を振って、遠心力で長くするとは思いませんでした。完成品は、とても綺麗に模様がついていて、この先ずっと使っていきたいと思っています。(長尾)



完成品(左：祭城、右：長尾)